

MACF 礼拝説教要旨

2024年9月29日

「信仰の継承」

ヘブライ人への手紙 12 章

1 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、
2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。

このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

1) 信仰の歩みを継続すること

私たちの信仰は一時的に「何かを頼りにすれば良い」わけではありません。むしろ、信仰はイエス様との出会いのあと、ずっとイエス様との絆を深めながら生きることを意味します。

そういう歩みを生きた先輩たちをヘブライ人への手紙 11 章に見てきました。

継続のためには忍耐が必要であり、足を前に進め続ける必要があります。

たとえば、山登りの場合、自分の足を前に出さない限り決して山頂に到達できません。さらに、自分の足を前に出さなければ無事に下山できません。

上りも下りも足を前に出し続けなければなりません。それができなければ登山に成功したとは言えません。

忍耐強く、たとえば、一步の歩幅が 30 センチだとしても前に足を出し続けることが重要なのです。

それはその日のみ言葉との出会いや祈りの時間が 1 分でも 5 分でも、継続することに意味があるのです。

2) 重荷と罪をかなぐり捨てて

山登りに例えて言えば、山頂に向かう時、余計な荷物は山小屋に置いて行きます。

重荷をそっくりになってしまうと、疲れてしまって、山頂には到達できたとしても重荷が重すぎ、大きすぎてゆっくりと山頂での周辺を眺める余裕など生まれなくなるでしょう。

それに山頂に向かっているとき、あまりよそ見をしたり、うっかり寄り道をしないことが大事です。

さまざまな「自分のプライド」「自分の業績」「無理やり集めた自己肯定感」などを毎日意識の中から外して、イエス様と向き合うことが重要です。

それに自分だけが気づいている「さまざまな罪・習慣・神様への反抗心」をイエス様に赦していただくことで、捨て去り、イエス様に向き合う必要があります。

その際、重要なのは「沈黙」「黙想」を覚えることかもしれません。

「静まる」ことがとても大事なのです。

私たちは頭の中で常におしゃべりをしています。

それは、イエス様からの細かい声を聞く機会を逸してしまうこととなります。

聖書の言葉がなかなか心に入ってこないのです。

3) 信仰の創始者、完成者であるイエスを見つめながら

そして、私たちはイエス様ときちんと向き合いながら前に進むことが大事です。

イエス様こそ、信仰の創始者、完成者とあります。すなわち、信仰について

「最初から最後まで」すべてをご存知なのです。

信仰の歩みに必要なすべてのことをイエス様は知っておられ、イエス様は助けてくださいます。

そのお方は、私たちひとりひとりの初めから終わりまで、知っていてくださいます。

その必要も、その存在の重要さもイエス様はご存知です。

だからこそ、イエス様のみ言葉、行為、そこから伝えられるメッセージを感じ取り、そのお方に生かされ、守られていることを日々、経験しながら、前に進むのです。

4) 苦難に耐えながら（イエス様の苦難を思い出しながら）

そして、今朝の最後の言葉は重い言葉です。

イエス様は、その歩みを継続する中では苦難の連続でした。

生まれてすぐにエジプトに逃げ、難民生活を経験し、貧しい仕事に耐え、

その生まれに疑念をもたれ、貧しい生活に耐え、誤解され、いい加減な裁判に

振り回され、十字架で殺されることになりました。

イエス様の歩みを思い起こして、その全てが私たちのためのものであった

ことをしっかり心に留めつつ生きるのです。

フィリピの信徒への手紙 2 章を読みます。

3 何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、

互いに相手を自分よりも優れた者と考え、 4 めいめい自分のことだけでなく、

他人のことにも注意を払いなさい。 5 互いにこのことを心がけなさい。

それはキリスト・イエスにもみられるものです。

6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、

7 かって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。

人間の姿で現れ、

8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。

9 このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。

10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、

11 すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、
父である神をたたえるのです。

「ひとりの孤高の生涯」 関根一夫訳

彼は、世に知られぬ小さな村のユダヤ人の家庭に生まれた。

母は、貧しい田舎の人だった。

彼が育ったところも、世間にはあまり知られていない小さな村だった。

彼は 30 歳になるまで大工として働いた。

それから、旅から旅の説教者として 3 年を過ごした。

一冊の本も書かず、事務所も持たず、自分の家も持っていなかった。

彼は、自分の生まれた村から 300 キロ以上出たことはなく、

偉人と言われる有名人にはつきものの「業績」を残したこともなかった。

彼は、人に見せる紹介状を持たず、自分を見てもらうことがただひとつの頼りだった。

彼は、その地域を巡回し、病人をいやし、足なえを歩かせ、盲人の目を開き、神の愛を説いた。

神は善人にも悪人にも雨を降らせ、太陽を昇らせ、溢れるほどのいのちと愛を提供しておられることを、

語った。

ほどなく、この世の権力者たちは彼に敵対しはじめ、世間もそれに同調した。

彼の友人たちは、みな逃げ去った。

彼は裏切られ、敵の手に渡され、裁判にかけられ、ののしられ、唾をかけられ、殴られ、引きずり回された。

彼は十字架に釘づけにされ、二人の犯罪人の間に、その十字架は立てられた。

彼がまさに死につつある時、処刑者たちは彼の地上における唯一の財産、すなわち彼の上着をくじを引いてわけていた。

彼が死ぬと、その死体は十字架から下ろされ、借り物の墓に横たえられた。

ある友人からの、せめてものはなむけであった。

2000 年という長い年月が過ぎていった。

今日、彼は、人間の歴史の中心、前進する人類の先頭に立っているようだ。

「かつて進軍したすべての軍隊、かつて組織されたすべての海軍、かつて開催されたすべての議会、かつて権力を振るいながら統治したすべての王たちの 影響力のすべてを合わせ一つにしても、人類の生活といのちに及ぼし与えた影響の大きさに、

あの『ひとりの孤高な生涯』には到底及びも つかなかった。」と断言しても間違いではないだろう。

MACF の礼拝映像はこちらです。

https://youtu.be/Ry_JeRhldvg

